

隈川雑詠（その一）

広瀬淡窓

亀山宛として水中央在り

伝是れ毛侯の古戦場

画戟彩旌空しく一夢

芦花乱発して月蒼蒼

【作者】広瀬淡窓（一七八二〜一八五六年）（天明二年〜安政三年）・日田出身の江戸時代の儒学者で、教育者、漢詩人。日田の長福寺に塾を

開き、これを後の桂林荘、咸宜園（かいぎえん）へ発展させた。咸宜園は一八九七年まで存続し、入門者は全国各地から集まり、

延べ四〇〇〇人を超える日本最大級の私塾となった。豊後三賢人の一人。日田市長や衆議院議員（郵政大臣）だった広瀬正雄氏は淡窓の弟の広瀬久兵衛の子孫であり、その子息は現大分県知事の広瀬勝貞氏である。

【語釈】*龜山：日田市内の小山で、隈城があった。 *宛：ちやうど、あたかも。

*毛侯：日田の隈城主をしていた毛利氏は一六〇一年に佐伯に封じられた。 *画戟彩旌：美しく飾った鋒や彩りも鮮やかな旗、差物。

*蘆花：あしの花 *蒼蒼：あおあおとしている様。また、あおみを帯びている様。

【通釈】亀山は往時と変わらず、昔の儘の隈川の中央にある。この亀山の地では、昔、毛利侯と島津軍が戦った古戦場があると伝えられている。今日、穏やかな水辺にたたずんでいると、此の処で鋒や鮮やかな旗を立てて戦ったことなど、一場の夢にすぎぬように思われる。ふと見れば、河原には月が青白く、葦の花の咲き乱れた光景を照らしている。